山内ふるさと絵図作成開始

山内
エコクラブ

よみがえる！ふるさと山内

人の記憶を価値ある地域の宝とし、未来を創ろう

目的：「ふるさと絵図」は、そこに生きる一人ひとりの心に息づく思い出を集めて描く、地域の「生活ものがたり絵」です。その土地の生業や生活風俗、祭りや行事、四季のうつろい等、絵図に刻み込まれるのは、地域における人々の生活のあらゆる場面に及びます。

山内エコクラブでも、過去６年間の子どもたちと取り組んできた聞き書きを発展して、地元を愛する地域の方々と一緒に知恵と記憶を集めるふるさと絵図作りに、本格的に動き出しました。尊厳ある先人の知恵は未来につながる歴史として後世に残していくために、高齢者の記憶をもとに、地域のつながりや自然との共生文化の見直し、モノを大切にする循環型エコ社会の再構築をめざします。地元だけにとらわれずに、他所に発信し、他所から見に訪れる文化と知恵がいっぱい詰まる絵図を地域の宝として創りだし、地域を元気にしていきましょう。

実施主体：山内エコクラブ・山内ふるさと絵図作成委員会

進捗状況：平成 27 年度　これまでの聞き書きを集めた「山内回想遺産」発行
山内ゆうゆうクラブのみなさんに協力いただいた、昔の記憶五感アンケート集計
先進地事例から学ぶ研修会開催　（8 月 27 日・40 名の参加）
聞き書き会開催（裏面）と個人の方
集落ごとの聞き書き

平成 28 年度予定
6 地区毎の絵図の作成（絵描き）

経費：山内エコクラブ

8 月 27 日研修会風景

滋賀県下３０か所で展開されるふるさと絵屏風とは？

（滋賀県立大学　上田　洋平　助教）

「ふるさと絵屏風」は、ある集落や地域を対象にして、そこに生きる一人ひとりの心に息づく思い出を集めて描く、地域の「生活ものがたり絵」です。人々の心に刻み込まれたふるさとの印象を表現するので、「心象絵図」とも呼ばれています。その土地の生業や生活風俗、祭りや行事、四季のうつろい等、絵屏風に刻み込まれるのは、地域における人々の生活のあらゆる場面に及びます。

「ふるさと絵屏風」は、完成後の活用が大切です。例えば、小学校での地域学習の時間に、絵屏風を見ながらお年寄りが語り部として自らの体験を語る「絵解き」をしたり、お盆にお寺でこれを囲めば、久々に集う親類同士が懐旧の情を深めます。絵を見たとたんに、認知症の方の身ぶり手ぶりが甦り、ワイワイとお話の輪が広がるという事もあり、介護予防への活用も試みられる等、さまざまな活用が期待できます。

上田洋平氏監修「ふるさと絵屏風をつくる」リーフレットから引用しています。

冊子『山内回想遺産』ができました。

山内エコクラブでは、平成 21 年度から子どもたちと一緒に「山内の自然、歴史文化、高齢者の知恵」に着目しながら、活動してきました。

平成 25 年度からは、山内自治振興会　地域福祉部名人発掘事業で発掘された山内の名人さんたちと一緒に、ふるさと山内を振り返りながら、テーマごとの昔語りを始めました。山内小学校の思い出話、戦争体験、昔の道、民具、食べたもの・・・等、いきいきと語られる様子が A4 で 52 ページにわたります。ご希望の方は、ご連絡ください。

１冊：１０００円（送料込）
申し込み締め切り：平成 28 年 1 月 31 日
申し込み先：
現金書留で 1000 円を同封し、申し込みください。
住所：〒528-0208　甲賀市土山町黒川 2063
竜王真紀　　行き
携帯　090-7966－2262
（土・日・祝日にご連絡ください）

発行：山内エコクラブ　　平成 27 年 12 月末
問合せ先：メール　ryuoh-mtm@maia.eonet.ne.jp
ホームページ　山内エコクラブ　　http://yamaeco.net/

山内エコクラブ＆山内ふるさと絵図作成委員会

地域聞き取り会報告

平成27年度聞き取りは関西学院大学の学生さん（平成27年10月17，18日）、奈良教育大学の学生さん（平成27年11月22、23日）にもご協力頂きました。出された思い出話を一部紹介します。一部差別的な表現がありますが、民俗・時代背景によるものです。ご理解ください。

黒川

・青瀬が橋は板橋だった　洪水でも橋は流れなかった
　大雨の時は流しておく
・家には牛がいた、牛は家族、農業で牛を使うが、牛が機嫌を損ねたら田んぼの中で動かなくなって大変だった、牛は頭がいいかならな
・牛はトラクターかわりだったが、お金がなくなると牛を売ることもあった。かわいそうな気分だった。
・牛は黒い牛やな　農協で牛を買って、雌を産んだらお金になった
・山羊もいたな　乳のため、羊もいた・・・羊でセーター作らった
・歌舞伎役者が劇をした。オノエキクゴロウ　昭和２５，２６年ごろ
・土葬で昔は座かんやったけど、人が死んでから姿勢を作るのがたいへんだった、いつからか？寝棺になった
・マムシ、タニシ、ザリガニ食べた・お米をつくのに水車小屋があったな
【黒川市場　女子会】
・大家族だったから朝から３升のお米と汁を作っていた。おかずには漬物
・昔は５時起きだった。今は８時起きになってしまった。
・箱膳の中には箸、茶碗、皿、コップが入っていた。食べ終わると、番茶ですすいで蓋を閉めていた。戦後は井戸水で洗うようになった。
・小学校の時にどじょうとりをしていた。どじょうは夜に懐中電灯で照らすと集まってきた。取ったどじょうは卵とじで食べていた。食料を確保するのに必死だった。
・中学校から帰るときは、トラックにしがみついていた。
・常に予備のわらぞうりを持っていた。
・山内には産婆さんが２人いた・妊婦も生まれる直前まで働いていた。
・蚕を飼っていた。桑の葉を食べる音がしていた。
・箱膳を使い、１週間ほどは洗わなかったが、お茶できれいに洗う事を
　自己責任として子どもの頃から学んでいた。

猪鼻

・昔は紅葉だけでなく桜もきれいであった
・寒所の桜はきれいだった、よく道草した
・東峠から西峠までずっと家があった　６０軒ほど
・いろいろな名字があり、それぞれい屋号があった
・昔は猪鼻にも太鼓祭りがあった
・正月の２日にはししまいが来たな
・２月の田村さんのお祭りでは伊勢（三重県）から来る人の休憩場であった
・昔の火頭古神社の紅葉はもっときれいで、写生に来る学生もいた
・お医者さんは土山の松本さんところに行ったけど、山内にも立川さんがあった。だいたい６０歳くらいで亡くなっていたけど
・友達関係は仲良く、字に子どもが２５人ほどいて、上級生が指導した

山中

・昭和１０年代頃は女性は着物を着ていた
・結婚は拒否できない
　家のかくをそろえてある程度親が決めた
　「もうたってくれ」と。
・離婚したら、家の敷居はまたげない
・出産に時期を思案した
・姑さんや小姑さんの対応は気を遣った、
・洗濯は川か井戸。お風呂の水は川の水
・産婆さんが来てくれ自宅出産　　産婆さんは自転車で来てくれた
・おむつは浴衣を切って作る
・田んぼに赤ちゃんを連れて、籠に入れておいたら落ちていた
・嫁にとついいだあと、嫁煎り道具を近所が確認した
・盆踊りは楽しかった　　子どもの成長がなによりの楽しみであった
・お正月はおせち料理作りなどで忙しかった、煮炊きもの
・餅つきは、かきもちやあられ作りで　６升くらいしたで

上延悠紀三さん宅

・山内小学校まで鞍骨を通って徒歩で２時間かけて通っていた。
・山女原の太鼓踊りについて
小学校６年で面をつけた。２年面を経験。そのあと貝吹を２年していた。太鼓の経験が５年。ふつうは３年。歌出しが１０年していた。練習は14時から朝方までしていた。３つの踊りがある　お宮踊り、お寺踊り、花見踊り
・学校の行き帰りで練習していた。・歌ではなく唱えごとであった。
・伝えてもらう子が踊りを見ていないと踊れない。
・兄たちはみんな働きに出てしまったので、男手は自分一人だった。
・田作に田船を使っていた。
・戦争時代は沼津の海軍工作学校に行っていた。
・戦地には行っていないが、工作学校に行っていた。兵隊に行きたくなかった。
・仲間同士でたたき合いをして、兵隊に「死にたい」と思わせるように仕向けていた。
・終戦が分かって、泣いて喜んだ。
・土に埋めてお米を隠していても、警察が棒でつついて調べていた。土に隠せないので、屋根裏に隠したら、ネズミに食べられた。

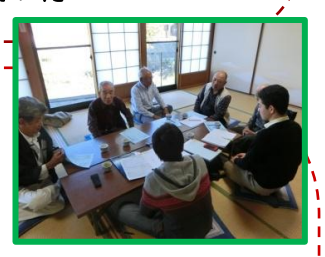
笹路・山女原

・夏の頃は、耕耘機なんてものはなく、牛の力を借りていました。朝早くから起きて、牛のかいばを作ってやり、おなかをいっぱいにしてやって、牛と共に田んぼに行った。雨の日は、カッパなんてなく、みのやござをまとって、牛と共に働いた。
・秋は、脱穀機なんてものは藁の棟で足踏でガタンゴトンと稲こぎをしました。それをカマスに入れて持ち帰り、夜なべに仕分けた
・藁ぞうりは通学の大切なはき物、学校が遠いので、２日の帰りは破れた。雨降りは、下駄ばきですが、帰りは鼻緒が切れた。
・女性は夜業に子どもの着物を縫う。夏は、浴衣、秋春は袷、冬は綿入れ、子どもの多い家は大変だったと思う。
・川をせき止め遊んだ　魚とり、
・カクレンボ、タンスナガモチ、縄跳び、
　馬跳び、木のぼりは楽しかった
　・山の神の唄をわけのわからん子どもたちが歌っていた

黒滝

・黒滝は奥に長い　三重県との隣接　　１０キロ奥で炭焼き
・黒滝の８割は炭焼きをした　　現金収入は炭
・炭をもって担いだ　１５キログラム程、重たい
・戦争が終わって、木材が必要とされて、木が売れた
・冬は雪がよくつもったな　　６０センチ以上
・祭りは７月１１日　花笠踊り　　長男だけ　雨が降ろうが関係なくした
　祭りではお客さんを迎えて、親戚でご飯作った
　巻きずし、どうかんだんご　鶏をつぶして食べた
・かまどでお米を炊くが、手での水加減　　麦ごはんが多かった
・身籠っていても働いた、よく動いたほうが流産しにくいと言われた
　そもそも、強い子しか生き残れないのだ・・・・と言われた
・ウナギ、アユは御馳走だったが　食べた
・炭の作り方：窯を組んで、原木を立てて詰めて、口で火を焚いて、炭化する。火を止める時期は煙の色で判断する。煙突の上に木を置いて、それが炭になったら、頃合い。煙突から空気の口を調節する。早くできたものは質が悪い。その調節が難しい。窯のふたをするときには水がいる。炭は火鉢などに使われていた。窯は後はあるが、もうない。窯の直径は８から９尺。・１回で30～40俵の炭ができた。
・昔は坂に丸太を敷いて、木材を運んでいた。それから川を使って運ぶようになった。
・杉やヒノキを山内から仕入れて、焼き加減が難しい。
・子どものころ、冬休みは火待ちなどを手伝った。木を集めて、日の手入れをして、窯から焼けた炭を出して、原木を入れる手伝いをした。
・３日冷まして、その間に原木を切る・焚くのは２日間ぐらい。

吉田権衛門さん宅



・牛は博労（ばくろう）が三重県からぞろぞろと
　連れてきていた。
近くの地蔵広場で休憩させ、牛の草鞋を履き替えさせていた。足４本とも。
・山中に坂下名義の土地が多かった。坂下の方が裕福だった。
・東海道の名残…1本松を切ることになったため、公民館の机やカウンターとして活用。
・万人講常夜灯、毎週日曜日、山中の人が、近所の草刈り・常夜灯近くのトイレ清掃など行っている。
・熊野神社には神宮寺があったが、廃寺になったため、そこにあった仏像は十楽寺に安置されるようになった。
・俵担ぎ競争があった。県大会種目にもなっていた。
・毎年４月14日太鼓踊りがされていたようだ。
・1月10日はオコナイがあり、大きな注連縄で、子ども生まれる家や、結婚する家の男子がぐるぐる巻きにされ、叩かれた。近年はましになっているが、かつて林口幸治さんはこれで肋骨の骨にひびが入ったらしい。組によって激しさが違う。
・子どもが生まれたとき、氏子になった証としてお神酒を口につけた。
・牛ザンマイ（埋葬地）があった。ピーエスコンクリと、のでさん裏の２カ所。
・櫟野観音道、入口階段になっている。
・地名…よめおとし、いわどんどん　など、
口伝えで残ってきている地名を記録してほしいな。

自然に感謝して共に生き、
食べることは命を頂くこと